

# 韓国の大学における日本語教育と日本研究 —現状と課題—

李康民 (Yi, Kang Min)  
Hanyang University  
韓国日本学会 会長

## 【要 旨】

戦後韓国の大学に日本関連の専門学科が設けられたのは1962年のことである。現在、197校の4年制大学の中で80校に及ぶ大学が日本関連の専門学科を設け、専攻として日本語を教えている。

今から逆算すれば48年間の歴史をもっているわけであるが、今日的な意味における日本語教育が大学に導入されたのは90年代に入ってからのものであり、そのような意味において日本語教育の歴史はまだ浅い。70-80年代には日本語教科書の動詞活用などの記述において学校文法に従うべきかどうかという議論があったものの、コミュニケーションに重点をおいた授業運営は殆ど見られなかった。また一方、今盛んに行われているマルチメディアを利用し、異文化コミュニケーションに重点をおいた授業運営は、それが韓国人の学習者にどれくらい効果をあげているのかについて厳密な評価、検証が行われないまま、一つのトレンドとして定着している雰囲気もなくはない。

こういう状況のなかで、日本語教育と日本研究を連携できるような教科課程はまだ現れていないのが現状であろう。殆どの大学の場合、低学年の時には初級段階からの日本語を習得させ、ある程度日本語を身につけた高学年になって文学、歴史、文化、政治、経済などの分野に接するよう教科課程が組まれている。また、最近では、日本語教育は日本人ネイティブ教師が、日本研究は韓国人教師が担当するのが一般的で、日本語教育と日本研究の二分化が定着していると言ってよい。

しかし、今世紀に入り、一学年の在學生（主に3年生）を日本の大学に留学させる

「現地学期制」を導入する大学が現れ、今後の日本語教育と関わり、その成り行きが注目される。

本発表ではいくつかの韓国の大学の日本語教育の現状を紹介し、日本語教育と日本研究を連携するための課題と展望を考えてみたい。

## 1. はじめに

本稿は、韓国の大学における日本語教育の現状の概略を報告し、大学教育において日本語教育と日本研究を連携するための課題と展望を私なりに考えてみようとするものである。そのため、本稿では、いくつかの日本関連学科

の実際の教育課程を提示しながら話を進めてみたい。

最近、韓国では中学・高校における日本語学習者の増大に伴い、韓国全体の日本語学習者は90万人に上るといわれている。しかし、一方、大学の日本語学習者は、今世紀に入りさほど数の増加を見せていない。急速なグローバル化に伴う社会の変化や大学システムの変化が大学における日本語教育にも影響を及ぼしていると言える。こういう状況の中で、われわれは、グローバル社会が要求する人材を育成するための日本語教育のありかたを改めて考えてみる必要がある。

このような立場から日本語教育と日本研究を連携するための課題と展望を考えてみたい。

## 2. 韓国の大学における日本語教育の現状

戦後、韓国の大学に日本関連学科が現われ始めたのは、1961年に韓国外国語大学に開設した日本語科が最初である。続いて1962年には国際大学日本語科、1967年には祥明女子大学（現祥明大学）の外国語教育科に日語教育専攻が設けられたのであるが、草創期の日本関連学科が共通的に「日本語」を標榜しているところが注目される。

韓国の日本関連学科が第2の拡充期を迎えるのは1980年代に入ってからである。すなわち、1970年代末から1980年代にかけて日語日文学科が全国的に波及し、大学における高級日本語学習者も大きく増加した。この時期に開設された日本関連学科はその殆どが「日語日文学」を標榜しているところに特徴がある。

1990年代に入ってもいくつかの大学で日本関連学科を開設している。この時期は、地域学の必要性が盛んに主張された時期でもあり、日本関連学科の多くは「日本学」を標榜する日本学科の名称で開設された。しかし、数としては、80年代のような勢いは既になく、この時期に入って一つの収拾期を迎えたような気がする。

このように概観してみると、韓国の大学の日本関連学科は「日本語」から「日語日文学」へ、それがまた「日本学」へと変化しており、大学が目指している日本研究のありかたの変化が読み取れる。また、最近では、既存の日語日文学科の名称を変える大学も現われ、全体としては「文学」から「文化」へシフトが移行する傾向を見せている。

このような流れの中で、現在には197校の4年制大学のうち、約80校に及ぶ大学が日本関連の専門学科を設け、専攻として日本語を教えているのが現状である。

それでは、日本語教育の内容にはどのような変化がなされてきたのだろうか。この問題を考えるためには、まず草創期の日本語教育の実体を理解しておく必要がある。何より、終戦後20年間あまり日本との交流は断絶されて

おり、草創期の日本語教育を担当できたのはいわゆる植民地時代に日本語を国語として覚えた韓国人しかいなかった。したがって、当時の日本語教育の担当者は、稀に戦後日本に密航留学して帰ってきた人もいたものの、主に日本の師範大学や私立大学の国文学科を卒業した韓国人であった。それが日本語教育の第1世代にあたるわけであるが、その生い立ちの背景から、彼らの日本語教育は多かれ少なかれ国語教育の立場で行われる傾向があったことは否定できない。まだ日本語教育の理論が確立していなかった当時としては、今のような日本語教育の授業運営は殆ど期待できなかった。ちなみに、私も第1世代の先生たちに日本語を学んだ世代の一人である。

それが、90年代に入り、今日的な意味における日本語教育が韓国の大学にも導入されることになる。その背景としては、日本における日本語教育が独立した学問分野として成長したこと、そして多くの韓国の大学においてネイティブ日本人教師の採用が拡大されたことが考えられる。その結果、最近では、日本語教育は日本人ネイティブ教師が、日本研究は韓国人教師が担当するのが一般的な傾向として定着している。

### 3. 韓国社会における日本語の位相の変化

冒頭で触れたように、韓国では中学・高校における日本語学習者の増大に伴い、韓国全体の日本語学習者は90万人に上るといわれている。高校で第2外国語として日本語が教えられたのは1973年からであるが、2001年からは中学校でも生活外国語として日本語を選択できるようになった。中でも他の第2外国語と比べ、日本語を選択する学生の数は圧倒的に多い。

中学・高校で日本語を選択する学生が大きく増加しているのは、アニメやゲームといった日本のポップカルチャーに馴染んでいる青少年たちが増えていることと関係があるが、それとともに韓国語と言語構造が似ている日本語に対しては学習者の学習負担があまりかからないことも大きく作用していると思われる。

しかし、一方、大学の日本語学習者は、今世紀に入りさほど数の増加を見せていない。急速なグローバル化に伴う社会の変化、またそれと連動する大学システムの変化が大学における日本語教育にも影響を及ぼしているのである。

60-70年代、恐らく80年代までも、日本語は韓国社会において就職と密接な関係にある外国語の一つであった。しかし、今は、日本語能力だけでの就職は難しい。急速なグローバル化によって英語能力が絶対的に要求される社会になったのである。それによって大学においても英語専用講義が急速に広まっており、大学によっては日本関連学科にも一つ以上の英語専用講義を設けることを要求するところも現われるようになった。

このように、韓国社会における日本語の位相は、従来の「実用語」から「

教養語」或いは「文化語」の方向に変わっており、大学での日本語教育もこのような環境変化にどう対処していくべきかという問題が大きな課題として台頭している。

#### 4. 日本関連学科の教育課程

ここでは、韓国の大学における日本語教育と日本研究の実態を分かりやすく説明するために三つの大学の具体的な教育課程を提示してみることにする。

##### 2008－2009年度教育課程

学年	漢陽大学	高麗大学	中央大学
1－1	日本語基礎 1 日本語文法 1 日本語音声学基礎	共通教養 選択教養	日本社会と文化 日本語演習 1
1－2	日本語基礎 2 日本語文法 2 日本語と漢字	共通教養 選択教養	日本語演習 2 日本語と社会 日語会話
2－1	日本語文章読み 日本語表現演習 日本の大衆文化 日本現代社会の理解 初級日本語会話 1	初級日本語会話 初級日本語作文 日文講読 1 日本文字と発音の理解 日本文学概論 1	日語講読 日語文法 インターネット日本語 日本近代小説の理解 日本大衆文化論
2－2	マルチメディア－日本語 1 インターネット日本語 日本文化と社会 日本語作文 日本の伝統文化 初級日本語会話 2	中級日本語会話 中級日本語作文 日本語文法 日文講読 2 日本文学概論 2 日本文化史概論	日語講読 日語作文 1 日語会話演習 日本現代小説 日本の茶道文化

3-1	マルチメディア—日本語2 中級日本語会話1 時事日本語 日本現代小説 映像日文学演習 日本歴史の理解	高級日本語会話 高級日本語作文 日本語学概論1 PCと日本語1 日本語教育概論 日本近代小説の理解 日本古典文学史 日本名作選読 日本言語文化の世界 日本伝統劇の理解 韓日比較文学入門	スクリーン日本語 時事日語 日語作文2 日本戯曲 日本伝統文化論
3-2	日本語特講 中級日本語会話2 日本文学の流れ 日本の宗教と芸術 現代日本文学と大衆文化	日本語学概論2 PCと日本語2 日本語教育史 日本語語彙論 日本語文字論 韓日語対照研究 日本近現代文学史 日本近現代詩選読 日本劇文学研究	日語音声学 日語学概論 日本文学鑑賞 日本古典文学散策 日本近世文学
4-1	現代日本語の理解 高級日本語会話 日文学翻訳方法 近現代日本文学の内と外 日本の旅行文化	日本語史1 日本語学研究1 日本語構文論 日本古代文学の理解 日本中世文学の理解 日本伝統詩歌の理解 日本文芸評論	日本書簡文 日本作家論 日本古典文学と文化
4-2	ビジネス日本語 異文化コミュニケーション 日本語セミナー 日本文学散策 近代日本の文学と社会 日本と西洋文明	日本語史2 日本語学研究2 日本語古典文法 日本語音声学 日本近世文学の世界 日本近現代文学の世界 日本古典文学研究 日本近代文学研究	日語コミュニケーション 日語翻訳演習 日本の文化産業

上の表を一瞥すると、三つの大学の科目編成は微妙に異なっていることが分かる。相対的ではあるが、漢陽大学は「日本歴史文化」の科目比重が高

く、高麗大学の場合は「日本文学」科目が強化されている。そして中央大学は高学年の科目編成をできるだけ少なく抑えているところにそのポリシーがあるようである。

しかし、低学年の時には初級段階からの日本語を習得させ、ある程度日本語を身につけた3・4年生になって文学、歴史、文化などの分野に接するよう教科課程が組まれていることは3校ともに共通している。こういう傾向は全ての大学に適用できるものであろう。また、最近では、会話を中心とする日本語教育は日本人ネイティブ教師が、日本研究のような内容中心の科目は韓国人教師が担当するのが一般的で、日本語教育と日本研究の二分化が定着していると言ってよい。

このような状況から分かるように、日本語教育と日本研究を連携できるような教科課程や教科目はまだ実際の教育の現場において運用されていないのが現状である。ただ、ここでは、大学の日本語教育と関わり、在職大学の漢陽大学で実施している新しい動きを紹介しておきたい。

漢陽大学では、3年前から、3年生を対象に日本の大学に留学させる「現地学期制」を実施している。これは3年生を二つのグループに分け、4月学期に25人、10月学期に20人を協定校の東海大学に留学させ、現地で単位を取得させるプログラムである。現地では、受け入れた学生たちにテストを実施し、日本語能力によって12のクラスに再配置されるのであるが、上位の1・2クラスの場合は、日本人在学生が受講する講座に入り自由に単位を取得することになっている。

このようなプログラムの強みは、現地での生活を通し、日本語能力だけでなく日本の社会と文化を身につけることができる点にある。また、現地学期制を経験した学生は日本社会に対する関心度が高く、彼らを対象にしてより専門性の高い内容をもつ授業の開発も十分可能ではないかと思う。このような可能性を視野に入れて現地学期制の今後の成り行きを見極めていきたい。

## 5. 日本語教育と日本研究を連携するための課題と展望

今まで述べたように、韓国の大学において日本語教育と日本研究を連携する教育課程や教科目はまだ確立してはいないとみるのが穏当であろう。日本語教育は日本研究と接点を持たないまま一人歩きをしているのが現状である。それでは、日本語教育と日本研究を連携するためにはどうすればいいだろうか。

まず、諸外国の日本研究者は、所詮日本語教育者でもあることを改めて認識する必要がある。また、日本語教育者側も、従来の日本語教育のありかたを再点検し、問題点を改善していく勇気と努力が必要であろう。何よりグローバル化に伴って押し寄せる英語の津波の中で、日本語教育の方向を改めて模索しなければならない。

このような認識を前提に、日本語教育と日本研究を連携するための教育課程や教材の開発に取り組んでいくべきであろう。そして、この場合、歴史文化的な背景をお互いに異にする諸外国の教育理論をどう築いて行ったらいいのかを議論しなければならない。

例えば、韓国の日本語学習者は、地理的条件や文化的背景、そして言語構造上の要因によって高級レベルの日本語能力を身につけることが比較的容易である。実際、韓国の大学には、交換留学やワーキングホリデーの活性化、現地学期制の導入などによって上級レベルの日本語学習者が相当の数に上っている。このようなことを考えると、韓国の大学は、日本研究に接点を持つ日本語教育の実現可能性が最も高い空間として改めて注目できるかも知れない。

## 6. むすび

グローバル化の急速な進展によって韓国社会も変化のスピードを上げている。政府主導による国際競争力の掛け声の下、韓国の大学システムの変化も加速している。日本語だけで就職ができる時代はもう過ぎ去ったようである。

このような環境の変化に日本語教育はどう対応していくべきであろうか。今回の中心議題である「日本語教育と日本研究の連携」は、そのための一つの方向を提示しているのではないかと思う。未来社会が要求する人材の育成、すなわち、バイリンガルからマルチリンガルへ、「日本語能力」から「日本力」へ軸足をおきながら新しい日本語教育の方法論を模索していく必要がある。それによって日本語教育の内容も一層豊かになるはずである。

## 参考文献

Yi, Kang-min(2007) “Study of the Japanese Language in Korea”, in Current State of Japanese Studies in Korea, published by Hanul Publishing Co. pp.107-124.

坂本正・小柳かおる・長友和彦・畑佐由紀子・村上京子・森山新(2008) 『多様化する言語習得環境とこれからの日本語教育』 pp. 14-38, スリーエーネットワーク

漢陽大学校(2009)『大学要覧』, 漢陽大学出版部

## Website

高麗大学日語日文学科:

<http://www.kujap.com/mail.html/>

中央大学日語日文学科:

[http://cajj.net/cajj\\_1/mail.htm/](http://cajj.net/cajj_1/mail.htm/)